

ひ、オニといひ、小なるをばヒメといひ、似て非なるをばイヌといひ、カラといふが如き、すべてこれ等の例によりて、其義をもとめて、その然るべからざる疑ふべき強て其説をつくるべからず、されば今こゝには唯其釋すべき事あるものをのみ註したる也、其釋を待たずして義おのづから明かなる物をもまた載せず、

〔倭訓栞前編八〕くさ 草をいふ、年ごとに枯腐るものなればいふなるべし、式陸奥國クマノ野神社あり、説文に菝草也と見ゆ、○中草は青きものなるに、詩詞に白草といへるは、胡地、草色は白しといへり、種をいふも草より出たり、なぐさみ種あつかひ種かこち種、わらひ種などいふ是也、

〔古事記傳五〕草は莖多ク、フサなりと、多きを布佐と云るこ、

〔和漢三才圖會九十二本〕名義

以時名者 迎春 半夏 夏枯草 欸冬 忍冬

以人名者 杜仲 王孫 徐長卿 丁公藤 蒲公英 劉寄奴 何首烏 使君子

以物名者 淫羊藿 麋銜草 鹿跑草

以地名者 常山 高良 天竺 迦南

以形名者 虎掌 狗脊 馬鞭 烏喙 鵝尾 鴨蹠 鶴蝨 鼠耳 牛膝

以性名者 益母 狼毒 預知子 王不留行 骨碎補

強名之者 沒藥 景天 三七 無名異 威靈仙 沒石子

〔日本書紀神代一〕生草カキ祖草カキ野カキ姫亦名野槌、

〔古事記上〕生野神名鹿屋野比賣神、亦名謂野椎神、

〔古事記傳五〕加夜カヤは此卷末に、以鶉羽爲葺草とありて、訓葺草云加夜と註せるぞ本義にて、何にもあれ、屋葺む料の草を云名なり、万葉一卷に、吾勢子ワガセ波借ハカリ廬ホツラ作良須ス草カヤ無者コ小松コノマツ下乃ノ草カヤ乎コ荊コノ核カヤ、